

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成十八年四月一日発行
通巻九八〇号（毎月一回一日発行）

京鹿子

4月号

春近し
丸山佳子

雪嶺に言葉はいらぬ望遠鏡

出初式消車の列にあらかしこ

風花に舞妓の匂ひ祇園まち

降る雪に無い袖ふつて恙なし





寒竹林非の打ちどころ探せども
雪解坂ただでは起きぬころびやう
猫柳いつからここでこの岩と
雪が消え木や竹あはれ折られ損
春一番にうけて立つ貌かほこの犬も
初つばめ川は幾すぢ海に入る

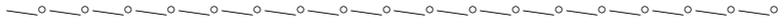


豊 田 都

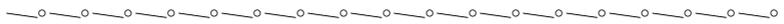
清響集 その六十

雪折のこだま灯落とす里々に
山晴れて風のみちびくいぬふぐり
いぬふぐりまたまた歩幅乱しけり
雑木山日もいつぱいに芽吹きぬる
比良暮雪おのがあかりにうかぶのみ
春浅し城址へ水を越えもして





木立より出ず引き返す春浅く
指刺ししものまんなかに針供養
深々とある一刺や針供養
水菜採るみなみにひらけ雲なき日
比叡より高き五條の糸柳
糸柳そこより流れそむひぐれ
早春やまた川筋に歩をひろふ
てのひらにのることもなき二月かな



秀華採集

どちらかと言へば火が好き落葉搔き

木戸渥子

橋本多佳子作品は火と落葉焚との取り合わせであるが、これは落葉搔き。心に火が住みついているという点で評価したい、すなわち好きということの具体的な動作として。

なみだ目となるまで冬の田に佇てり

松本鷹根

雪炎の中に身をおき身を焦がす

西條李稞

前句の心は風狂。日常を離れるところに詩が生まれる。後句も同じ観点から評価できる。非日常・非現実の中に身を置くことは詩的環境を作ることになる。

鈴鹿 仁

春障子

相性は白紙のかたち春障子
きさらぎの町は無色の風通す
信ずれば枷の解かれし涅槃西風
貝寄風や交す一語は円居まどみなる
梅ふふむ学びの絵馬の風に鳴り
バリカンに青つむりして野風呂の忌
東風吹かば案ずるよりは艶ばなし

近 詠

宇都宮滴水

飛簷の尖

恋の猫隙を隠して隙つくる
下萌えの寸土を侵す人の影
さくらの芽ほとけの灯借りにけり
春浅し韋駄天走るしか知らず
芽木の雨飛簷の尖に赦し乞ふ
落椿思ひの丈を言はずとも
烙印も風に吹かるる牧開き

神麓集



俊寛や黒楽茶碗冬ざくら
 本阿弥の白楽茶碗初二山
 光悦の雨雲茶碗冬ぬくし
 道の入の赤楽茶碗鶴凍てる

林 日圓

若井汲む 藤岡 紫水
 しろがねの闇打ち碎き若井汲む
 天は音忘れて澄みぬ大旦
 二日はや風の日暮れのあすなろう
 神鹿の遠目差ししに初日影
 福笹の小判さやかに鳴る夕べ

妻に代り針の供養も致さねば
 富士川や淡き面輪の冬の富士
 ポインセチヤ眼前にあり齒科の椅子
 加齢とは孤独への道冬の椅子
 冬満月我より前を影法師

北村 香朗

糸呑川雪にうもれて道とだえ
 水あふれ橋もとだえて雪降るる
 雪の橋通學生は後戻り
 スキーで渡る吊橋ゆれどうし
 大人たちの手にしかとゆだねて雪の橋

山田 耕子

雪 蛭 丸 山 冬 鳳
 雪蛭母在す如くなごみの里
 小春蝶取りまく風の陽の介護
 睨らめつこ手首に憩う赤とんぼ
 強霜に葉を張る南天庭日向
 柿紅葉雲の往来の低からず

老斑の掌に受く雪の解け難し
 初みくじ緋袴巫子の京なまり
 箸紙に書く名の増えて吾は老ゆ
 散りぬれど雪かゞやかす落椿
 雪こんこ子守唄では眠らぬ児

吉田 多美

神麓集



冬すすむ鉾山が遺せし文化財
文政の十二支の古伊万里冬すすむ
團琢磨写真の下の炉は焚かず
お手植系の記念樹はいま黄落期
暖炉燃え鉾山の遺産のもの綺羅に

角 直指

亡き数の星と瞬き年惜しむ
洒落吠えの積りの犬に泣き初めす
野焼き人寝釈迦鴉を茶毘にふす
寒月に大手門開く城星座
○滴水兄に寄す
魂若し蘆の角ぐむ湖ごゝろ

彌寝 瓶史

幸せは悲なきこと初鏡
大杉の真直天つく初詣
窓に嵌む比叡に向きて御慶かな
木枯や忘れ上手は生き上手
冬薔薇開かぬまゝに友逝きし

船越 美喜

散り残る葉と葉の隙に粒芽見し
朱雀門広場子連れの凧遊び
宮址より焼きし三笠を遠望す
冬落葉掃き集めしは猫が占む
冬田打つ東院續きの隣接田

奥村 鷹尾

「藍」も「愛」も日本の希望実千両
木綿よく絹はなほ好し新豆腐
沈黙は金などと言ひ懐手
盛り上がる黄味はればれと寒卵
あぢさゐのとながり冬芽濃むらさき

丹生をだまき

身を包む鬱気はがさむ冬至粥
体力は無気力育て冬籠り
体力気力萎えてまつこと寝正月
冬籠り鬱の穴ぐらに潜むかに
九十媪字の書きづらしと初電話

山田をがたま



京鹿子集

豊田都峰選

どちらかと言へば火が好き落葉掻き
窓は雪標本室の人の骨

京都 木戸 渥子

満腹のフエリー出航四温晴

無造作に神の削れり鴛鴦の雄

大年の糸こんにやくをほぐしをり

湖へだて視界雪嶺のみとせり

穂から枯る葦逆光の湖拡げ

枯れ芝の枯れを引き摺る影で去る

なみだ目となるまで冬の田に佇てり

風花や離別のことば地に着かず

落葉にも表裏美醜の木のベンチ

京都 西條 李稜

初日射すメビウスの輪の交叉点
急須より立ちし茶の香も寒の内

血縁といふ枷もあり寒牡丹

雪炎の中に身をおき身を焦がす

本懐を遂げ黄落に墓眠る

いささかの悔常にあり小六月

冬銀河注げ水城の大和の辺

いろいろの顔すぎさりし去年今年

裂帛の気合もろとも寒に入る

体臭が消え立冬の蒼い空

群からず浚ひては翔つ柿花火

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸